英語科教育法の効果的指導
——より良き教育実習の成立を求めて——

大　髙　常　昭

1　序論

英語科教育法は講義中心の１年前期の２単位修得後，後期の実習Ｉに接続される。前期ののの理論に基ずいて学生相互の実践練習中心の実習Ｉの１単位修得により，学内における教授法の修得が仕上がり，２年になって学外における教育実習への参加を通して学校現場における教授法の実践検証が得られる。

教育職員免許法施行規則により教育実習は事前事後の指導を含めて３単位となっている。本学においても，教育実習の事前事後の指導は当然２年になって丁寧に行っているが，特に１年後期に実習Ｉとして模擬授業の実践により法の事前の部分を拡大して，徹底した技能の精練を行ってきている。

課題は一年生の英語科教育法と実習Ｉの１年間の講義・演習の進行の中でどのように効果的に理論と実際を学生の身に付けさせるかということである。その際に時代の変化を考察し，伝統理論と最新の理論とを十分検討し，指導の重点をどこにおくかと言う事が教育実習の成功にもつながるし，免許状取得の効果的方法になると考える。

更にそれだけでなく，英語科教育法の効果的な指導は，指導理論の周到な説明解説ではなく，教育実習において，学生が不安なく，学校現場においても信頼されて，実習に当たれる指導力を身に付けさせる事であると考えている。今日の中学校英語教育の主流では，習慣形成理論から認知学習理論に教授法が変わりつつある。一方伝統的な Translation Method も根強い支持者がある。教育実習の現場では指導にあたる，様々な中学校英語教諭の指導法に対応出来る指導力を身に付けている必要がある。

従って教授法各論の指導においても現代に有効なものに限定して，中心は Oral Method, Oral Approach 及び Communicative Approach においている。課題はこれらの比重のかけかたと指導の重点のおきかたでありこれらを推論と，実習前後の検証により解明しようとすることが研究の中心である。しかしながらデーター上の裏ずけは現状では難しいので実践研究の形で考察を行った。

2　指導目標の構成

英語科教育法の指導目標は，中学校外国語科英語教授に必要な英語教授法について次の三点を中心に理解を深め，英語授業の指導計画立案の基礎力及び授業の指導力を育成する。

1）わが国英語教育の略史

2）中学校学習指導要領外国語科英語の解説

3）英語教授法の系譜

実習Ｉの指導目標は，前期に学習した英語科教育法を基に，実地に英語の授業の指導案を作成し，模擬授業をひとりずつ行わせ，英語指導の演習経験を学内で得させるようにする。

＊　　＊　　＊

指導のより具体的な目標として次の事を実行する。

1　音声指導について標準的な英語の発音，特に英語固有の子音，母音
　　文における基礎的な区切り
　　語のアクセント
　　文における基本的な強勢（ストレス）……（リズム）
　　文の基本的な音調
　　以上の他，音の連接，弱形（機能語），弱音部（内容語）
　　同化作用（assimilation）等について

2　英語のアルファベットの活字体及び筆記体の指導力

3　中学校の言語材料と高等学校のそれとの区別

4　英語教授法の系譜を理解しながら，教授法の理論の発展の方向を把握させる。

5　中学校の英語教師の取り上げている英語教授法の大方に通じていること

6　本学の推奨する英語教授法を身に付けること

7　教育実習の現場において指導教官の指示する教授法による英語指導案が英文でも和文でも即座に作成できる事

8　40人の生徒相手にマイクなしで発声が届く事

9　中学校の英語教室における教材・教具の使用に慣れていること。

10　１単位50分の中学校の英語授業の中で，切れ目なく指導の手順を組み合わせて指導内容を構成し，40名近い生徒に，ドリルを含めて多彩な学習経験を与えれる指導力をつける事

3　教授法各論との関連

1）教授法各論　以下に示すものについて系譜・歴史・内容を解説しながらこれらを現実に中学校で実施している場合の対応を含めて指導している。

a　Grammar Translation Method

リーディングと組み合わせて中学校では支持者があり長所と短所を示して指導している。中学校よりも高校で多く見られる。現実の対応としては教室英語の多用によりOral drill を少しでも加えるように指導している。

b　Reading Method

Coleman Report の後押しもありアメリカ，イギリスで一時期勢力をを持った。読む力，skimming などに見るべき価値がある。指導者の一方的活動に終わらないよう，出来るだけ questions and answers 等により生徒との，或いは生徒同志の interaction による言語活動を補うよう指導している。

c　Electic Method

Grammer Translation Method と Direct Method を折衷した指導法である。英語を聴かせる事，英語を話させる事，英語を使う喜びを与える事等に配慮させる。なお Palmer の Oral Method を手直しした新教授法を指す事もある。

d　Oral Method

音声を重視し口頭練習を中心とする指導法である。広義には Natural Method, Direct Method, Psychological Method, Guin method, Berlitz method, GDM も含まれるが，中心は Palmer の唱えた指導法を指す。

Palmer は言語には la langue と la parole の二つの分野があるとした。言語の学習には primary skill (H. S) と secondary skill (R. W.) があり，言語習得の段階として identification から fusion の域まで高めることとした。

Palmer は言語習得の五習性として次のように段階を示した。

1　auditory observation

2　oral imitation

3　catenizing

4　semantecizing

5　composition by analogy

英語の指導は言語指導として考え，音声から入ることを基本にする点で画期的な考え方で1，2，3，4，の順に学習が進行することは，現代の多くの指導法もこのことを

基礎にしている。

5の文構成力で substitution や conversion を示した。この技術を学生が知っていることは，指導技術として有力である。

Palmer は日本に来て言語系を異にする日本語や日本の学習状況を見て，新しい教授法と古い教授法の最もよい点を取り合わせるように述べている。

Palmer の指導法の中で oral introduction の技法が彼の考え方の essence を構成していると私は考えこれを学生たちに身に付けるよう指導している。

e　Oral Approach

Fries の提唱した指導法でアメリカの構造言語学と行動主義心理学を理論の基本にして重要な文法構造と文型構造を contrast の技法で体系化し，易から難へと教材を配列して指導するとしている。

指導技術として mim-mem practice（模倣・記憶）と pattern practice（文型練習）を用いる。特に Twadell の5段階の Language Learning の Steps は分かりやすく

1　recognition　　2　imitation

3　repetition　　4　variation

5　selecton

の手順の内4の variation における pattern practice いわゆる　1）substitution　2）conversion　3）expansion は具体的に cue の出し方を例示して学生にもその技能を身に付けさせている。中学校現場では今なお広範囲に行われている指導技術である。しかし，やりすぎると機械的で，教師中心の生徒にとって受け身の授業に成りやすい長所・短所を知って指導技術として身に付け実施を加減するようにさせている。

f　Communicative Approach

認知心理学および Chomsky の変形生成文法の出現に触発されて生まれてきた言語指導の考え方である。直接的にはヨーロッパ連合・EC 結成に合わせて，（現 EU）西ヨーロッパ EU 諸国間に統一した言語指導の基準を創設することが便利であると考えられて生まれてきた。

それは the Council of Europe（1973）の中間発表資料のなかで Notional Syllabuses として D. A. Wilkins により発表された。

これは外国語学習の目標は伝達能力の育成であることを協調している。そのためにコミュニカテイブな活動をさせる。つまり教師の仕事は生徒がコミュニカテイブな活動をさせることにある。

その方法として指導形態を多様にする。クラス全員，グループ，ペア，個人の活動と

変化させる。

Wilkins はコミュニカテイブな活動をさせるために機能・概念シラバスを提案した(Functional Notional syllabus)。

これは学習者のニーズを分析して必要な概念（例えば時間，時点，継続，頻度，量，動作，手段……等）と学習者の言語を使う機能（例えば提案，忠告，命令，禁止，指示，許可，勧誘……等）とによって配列したシラバスである。

しかしながら，学習者のニーズの分析は明確でなく，機能と概念は分類が難しい。また文法が縦になるために体系的な言語能力の内在化ができにくい。

つまり言語指導の方向性としては妥当と考えられるが具体的な理論と指導の一貫性のある指導法の確立までには至っていない。したがって，その提案の方向性を教科書により指導する時に，意図が具体化されるようにコミュニケーシヨンの成立を目指す授業の成立を学生に指導している。

2）本学の指導

Oral method, Oral Approach, および Communicative Approach を中心に指導するとともに，Oral Introduction と Pattern Practice の技法を学生の身に付けさせながら，コミュニケイシヨンの成立を目指させる。

4　本学の担当者としての考え方

英語の指導は，言語の指導であり，インド・ヨーロッパ語系と言語系統を異にして，ウラル・アルタイ語系に属する日本語を母国語とするわが国の中学生に対する指導は，次の考え方が適切であると考える。

1）音声から入る

2）口頭練習で英語の音声を再現できるようにする。

3）音声から意味に入る

4）音声から文字に入る

5）音声による意思伝達の方法を技能として学ばせる

6）聞くこと，話すこと，読むこと，書くことの四技能のバランスの成立を図りながら言語材料の系統性に合わせて，指導の段階を構成する。

7）Oral Method の考え方のうち，Oral Introduction の技法を master させ題材に応じて言語材料や，視聴覚教材の配列を工夫する。Oral Method の考え方と Communicative Approach は関連性があり特に Questions Answers による Interaction の成立は効果的である。

8）Oral Approach の考え方のうち mim-mem practice と pattern practice は程度を配慮すれ

ばわが国の中学生には有効である。Communicative Approach で指摘されているように言語の構造性を強く指導することは，中学生段階の指導では馴染まないと考えられるので程度が過度にならぬように配慮する。

9）Communicative Approach の考え方のうち題材と指導形態の工夫により多様なコミュニカテイヴな活動が創造できる。しかし言語活動・言語材料を含めて指導の系統性が現状では確立されていない。言語指導の方向性は極めて妥当であると考えるので言語材料の言語的発展段階にしたがって外国語としての英語の指導について，コミュニカテイブな指導過程を通して言語活動の内在化が目指せる指導を学生に身に付けさせるようにする。

10）教育思潮の進展につれて，学習の個別化，学習者の主体性の尊重，学習意欲の喚起の重要さ，学習態度の育成の必要性等が重んじられてきた。外国語学習理論における習慣形成理論から認知学習理論への移行は，このことと相互に関わっている。

意思伝達を相互にしようとする意欲の喚起と，発話の内在化を学習者に期待するとともに，外国語学習・外国文化に対する興味・関心をも深めようとするものである。その結果，言語としての外国語の理解と運用が一体となって段階的な進行を目指している。このことの把握と中学校の指導の実情を理解して，実習現場で十分に対応できる指導力を学生に付けるようにする。

5　指導内容の構成

次のように内容を構成して指導してきた。

英語科教育法の構成

1）英語科教育法略史（明治以降）(1)

(2)

2）学習指導要領の解説(1)　総則

(2)　外国語科（英語）　目標と言語活動（1年）

言語活動（2年）（3年）

言語材料

指導計画の作成と内容の取扱

3）英語教授法の系譜　概説

Oral Method

Oral Approach

Communicative Approach

4）英語指導計画作成要領

実習Ｉの構成

1）モデル授業の視聴とクラスルーム・イングリッシュ

2）指導案の作成演習１年２年３年及び Oral Introduction 指導

3）学習指導演習　1　２名実技　及び，指名の仕方，出席の取り方

2（１名30分）板書の仕方，チャートの扱い方

3　テープレコーダーの扱い方

4　発音，発声，フラッシュカード

5　机間巡視

6　ノート指導，ホームワーク

7　小テストの要領

8　オーラルイントロダクション

9　褒め方，叱り方

10　Q. A. の与え方　Interaction 等

4）実習演習総括

5）英語指導と評価方法（テスト問題作成方法を含む）及び実習Ⅱに向けての準備

6　実習中学校への対応

次のような中学校への対応と実習に関わる事前・事後の指導の状況がある。

1）実習生送り込みの手順

受入れ校予想地域の状況

受入れ予想校のリストアップ

受入れ教育委員会申請

受入れ校決定

受入れ通知受理

日程の内定

オリエンテーション実施

担当学年の内定

指導教員の内定

指導教材の内定

教授法の内定

指導案の作成開始

教育実習開始

短大側表敬訪問

精練実習

教育実習終了

2）中学校の現状

・中学校の教育課程（標準）（学校教育法施行規則54条別表第２）

	必修教科の授業時数								道徳	特別活動	選択教科	総授業時数
区分	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭				
第1学年	175	140	105	105	70	70	105	70	35	35~70	105~140	1050
第2学年	140	140	140	105	35~70	35~70	105	70	35	35~70	105~210	1050
第3学年	140	70~105	140	105~140	35	35	105	70	35	35~ 7	140 28	1050

1　この表の授業時数の１単位時間は，50分とする。

4　選択教科の授業時数については，外国語は各学年において105から140までを標準とし，外国語以外の選択教科は中学校学習指導要領で定めるところによる。

参考　各教科等の授業は年間35週以上にわたって行うように計画する

総則第５の（1）による

3）実習生の対象業務

・教職員に準じた服務・分限に従うこと。

・英語の授業

・英語以外の教育活動

道徳，学級活動，給食指導，朝・夕の短学活，清掃指導，クラブ・部活動，学校行事（体育大会，校外学習等）

4）オリエンテーシオン（事前・事後の指導）

教育職員免許法施行規則により，また実質的な必要もあって次の内容日程で指導を行っている。

＊　＊　＊

1）４月16日土曜10時～11時

第１回　オリエンテーシヨン（事前）

内容　学校への入り方　岡野

中学校の現状，実習生を迎える中学校の立場　岡野

中学校教諭の服務・勤務の仕方，服装，言葉ずかい等　大高

教員採用選考試験について，就職試験について　大高

実務連絡　教務課　山口

2） 5月14日木曜10時～11時（事前）

第2回　オリエンテーション

内容　学園長挨拶・学長激励の言葉　馬渡・木内

実務連絡　教務課　山口

授業計画作成上の配慮事項　岡野

訪問教授との連絡の仕方等　大高

3） 7月14日木曜14時40分～16時40分

第3回　反省会（事後）

内容　終了提出物等連絡　教務課　山口

全員による反省　司会　大高

実習の総括　岡野

後期実習予定者連絡　大高

学生の反省の要点

英語の授業でかなり英語を使えた喜び，生徒たちが実習生を慕ってくれた感激，指導の中学校教諭の暖かい指導，実習の厳しさの苦労の中で生まれた教職の認識等

7　指導の重点についての仮説の設定

英語科教育法と実習Ⅰの指導全体の中で以下の事項につき特に強調し，確実に意識して学生の技能と実力を養うようにする。この五点の設定を仮説とする。

1）外国語としての英語教育

a　小学校6年間の国語教育終了後の初めての外国語としての指導（ESL と区別）

b　学校外での英語の教育はゼロとみなす（全員がゼロからスタート）

c　言語として英語を使う楽しさ，喜びを味わわせる。

d　外国語は異文化理解の有効な手段として意識し，言語は文化，思想，科学，の carrier であることを自覚させる。

2）Presentation of New Materials

a　復習，導入，展開，整理の手順で授業が進むとき導入が勝負所である。

b　導入は oral introduction で行い学習者の能動的学習欲求を，言語は音声から入るかたちで，引き出す工夫を学生に身に付けさせる。

c　Oral Introduction を presentation of new matterials の中心に位置ずける。

3）Oral Introduction

a　発達段階に応じて言語材料を適切に構成し，目標の把握，表現の難易，分量の精選

を図り，聴く立場を考え redundancy にも注意する。

b　必要に応じて母国語を使う事も認める。チャート，ヴィデオ，実物を利用する。

4）Oral Approach

a　復習場面における pattern practice は効果的であり，その技術を身に付けさせる。但しウエイトをかけすぎると英語嫌いを作り出す。

b　英語は日本語と語系統を異にすることを意識する。
mim-mem practice は無意味ではない。

5）Communicative Approach
(Communicative Language Teaching)

a　教師から生徒に，生徒から教師に，生徒から生徒に，グループ，ペアも。

b　意思伝達に重点，完璧さは問はない。

c　場面設定の工夫を教材との関連で考えさせる。

＊＊＊4）と5）は理論上矛盾があるが中学校の実情も考えて，3），4）を生かしながら5）の方向性を把握して，これらを重点化する。

8　指導法対比表の提示

学生に Oral Method, Oral Approach, Communicative Approach, を説明する際に，具体的な Procedure 対比表を作成し提示すれば，理解を容易にする事に思いいたり別表の指導法対比表を作成し提示する事とした。その際3指導法に加えて，Oral Method と Oral Approach を重ねたものも提示することとした。この4 Procedure を横に時系列が分かるように配列すると，違いとそれぞれの特徴が容易に理解できると考えた。(別表参照)

指導法の対比表（別表）

Oral Method	Oral Approach	Oral Meth. + Oral Ap.	Communicative Ap.
1　Greeting and Calling the Roll			a　Warmup
2　Review 1) Choral Reading or Tape-listening 2) Recitation 3) Syntactic Questoins and Answer Work 4) Oral Composition 5) Test	A　Review 1) Writing Test 2) Chorus Reading 3) Pattern Practice	A　Review 1　Reading 2　Pattern practice 3　Dictation	b　Review 1) Oral Composition 2) Tape Listening
3　Presentation of the New Material	B　Presentation of the New Material	B　Presentation of the New Material	c　Presentation of the New Material

1) Oral Introduction 2) Test Questions and Answers 3) Model Reading 4) Chorus Reading 5) Free Reeding 6) Individual Reading 7) Explanation of the Meaning of New Words, Phrases and Sentences 8) Check of Understanding Through Teacher-Questions and Pupil-Answers 9) Writing	1) Introduction of the New Structure Pattern and Mimicry Memorizing Drill 2) Introduction of the New Words and Phonetic Drill 3) Reading 4) Translation and Explanation	1 Oral introduction 2 Mim-mem practice 3 Test questioning C Reading 1 Model reading 2 Explanating 3 Chorus reading 4 Indivudual reading 5 Chck of understanding	1) Oral introduction with Oral interaction 2) Explanation of the new structure 3) Pronunciations of the new words and phrases d Oral Reading 1) Model reading 2) Chorus reading 3) Free reading 4) Individual reading e Practice (Pair work) 1) Drill 2) Activity f Communicative activity Student-student dialogue
4 Consolidation 1) Reading for Complete Comprehension 2) Pattern Practice 3) Summarizing	C Consolidation 1) Reading 2) Oral Composition 3) Writing	D Consolidation 1 Repetition 2 Free conversation	g Consolidation 1) Writing the target sentences in the notebooks
5 Assignment of Homework 1) Recitation 2) Composition	D Assignment of homework	E Assignment of Homework	2) Assignment of homework

9 指導案例

次は千葉県東部の中学校における本学学生の公開授業指導案である。

第１学年４組　　英語科学習指導案

平成６年６月18日（金）第４校時

指導教官　　S．Y．

授 業 者　　E．M．

１．題材名　Sunshine I Program 4　国際電話でハロー

２．題材設定の理由

(1)　題材観

中学校における英語科教育の目標は外国語を理解し，外国語で表現する基礎的な能力

を養い外国語で積極的にコミュニケーシヨンを図ろうとする態度を育てるとともに，言語や文化に対する関心を深め国際理解の基礎を培うことである。本課ではコミュニケーシヨンを図るものの一つとしてあげられる国際電話を中学１年の基礎的な英語で十分にかけられることをわからせたい。

(2) 生徒の実態

男子生徒19名，女子生徒20名，計39名　全体的に落ち着いて授業に臨んでいる。英作文の際には未習の文型について質問したり，自分で学習して使うなど，意欲的な生徒もいる。生徒どうしの助け合いも見られる。学習意欲を失わないよう上位と下位の生徒どちらも満足するような授業内容，指導を心掛けている。特に教師の援助を必要とする生徒が２名いる。

3．題材の目標

(1) 似ているものを，「～か～のどちらか」と尋ねる表現と，それに対する答え方に習熟する。

(2) 人や物事の状態，人や物に対す感想などを尋ねる表現“How is ～ ?”を理解する。

(3) 相手に「何を～するか」と尋ねる表現“What do you ～ ?”と，“I ～.”という表現を用いて答える会話表現に習熟する。

(4) 数えられる名詞の単数形と複数形の違いについて理解させ，使いわけることができるようになる。

(5) 複数形の発音ができ，書けるようになる。

4．指導計画（４時間扱い　2/4）

第一時　Is this a pen or a pencil?

It's a pen.

第二時　What do you have in your box?

I have a pen and a pencil.（本時）

第三時　I have a telephone card.

I have ten telephone cards.

第四時　Rrview and Work Shop

5．本時の指導

(1) 題材　What do you have in your box?

I have a pen and a pencil.

(2) 目標・“What do you ～ ?”“I ～”という文を理解し，使いこなせるようになる。

・上の文を使い，友人同士で会話ができるようにする。

(3) 展開

学習内容と活動	時間	指導上の留意点と評価	資料
1．Greetings	2	・大きな声で挨拶させ，雰囲気ずくりをする。	
2．Review Free Conversation Ex. S1: Hello, Keiko. S2: Hello, Hiromi. S1: How are you? S2: Fine, thank you. And you? S1: I'm O. K. Do you like fish? S2: Yes, I do. Do you like fish? S1: No, I don't. I like meat. Do you like meat? S2: No, I don't. S1: Thank you. S2: You are welcome.	10	・既習の文型が正しく使われているか留意する。 ＊まとまった会話ができているか。	各自会話の中で必要とする物
3．New Materials 1）Oral Introduction T: I have 4 classes in the morning. And I have lunch. In the afternoon, I have 2 classes. After school, I play basketball. What do you do after school? I play basketball. ・Test Questioning Q1: 午前の授業は何時間か。 Q2: 午前の授業の後何をするか。 Q3: 午後の授業は何時間か Q4: 午後の授業の後何をするか。	4	・教師の英文を聞き，絵をヒントにして，新文型が何であるか類推させる。 ・だいたいの意味を理解させる。	Pictures
2）Explanation What do you do after school? I play basketball.	4	・新文型を板書する。	Notebooks
3）Pattern Practice ・What do you play? I play ～. ・What do you like? I like ～.	8	・何度も言わせ定着させる。 ＊正しく言えているか。	Pictures
4）Chain Practice ・What do you like? I like ～. ・What do you do after school? I ～.	8	＊理解し，正確に言えるか。 ・下位の生徒を援助する。	
4 Textbook 1）New Words 2）Listening 3）Model Reading	10	＊正確に読むことができるか。 ＊どれくらい把握できたか。	Flash Cards

4）Choral Reading 5）Understanding		・長い文，読みずらい文は切って読む。 ・正しく読めているか机間巡視する。	
5　Consolidation 1）Underlining Key Sentences 2）Repeating Key Sentences	3	・この課で習った重要な文型が何んであったか確認させる。	
6　Greeting	1		

Textbook: Sunshine I Program 4-2

Emily: Happy birthday, Mom.

Mom: Thank you. But my birthday is tomorow.

Emily: Oh, is it?

Mom: Yes. What do you usually do after school?

10　実習終了後の検証

9月に下記内容で検証を実施した

教育実習検証調査（該当を囲む）

6. 9. 19

I　実習実践の検証

1　実習生氏名　学年　　組　　番　　氏名

2　実習校名　　都・県　　市・町・村・立　　中学校

3　担当授業学年　　1　2　3

4　英語実習授業時間数　（　　）

5　道徳実習授業時間数　（　　）

6　学級活動授業時間数　（　　）

7　その他の教育活動（参加し指導したもの）あれば記入

8　指導教諭　　男・女　予想年齢（　）　予想経験年数（　）

9　指導教諭の指導法　　文法訳読法，Direct M, Oral M, Oral A, Electic M, Communicative M.

10　英語実習授業の指導法　文法訳読法，Direct M, Oral M, Oral A, Electic M, Communicative M.

11　実習指導教諭の指導助言について

自由にやらせてくれ，必要に応じて指導した

その教諭の指導のとおりを指導された

何等指導されなかった

12　教科書名

13　使用教材教具　　TR，チャート，フラシュカード，Video TR，TV OHP，プリント教材，黒板，LL. Analizer.

14　生徒の反応　　非常に協力的，協力的，普通，非協力的，非常に非協力的，反抗的

Ⅱ　重点の検証

1　外国語としての英語教育

ESL との違い，全員ゼロから，使う楽しさ，文化の carieer

2　Presentation of New Materials

導入に全力かけたか，音声から入れたか，Oral Introduction を導入の中心に入れたか。

3　Oral Introduction

適切に構成し演技できたか，日本語・チャート等の並行使用

4　Oral Approach

pattern practice, mim-mem prractice

5　Communicative Approach

interactive，意思伝達，場面設定と教材・題材

Ⅲ　意識検証

1　実習前　とても楽しみ，期待，普通，不安，とても不安

オリエンテーシヨン　　よかった，普通，くどかった

2　実習中　指導教諭　　とても優しい，よく指導してくれた，普通，冷淡，とても不愉快，極めて無能力

本学専任者表敬訪問　　元気ずけられた，普通，かえって緊張した

3　実習後　参加してつらい事多く後悔

参加してよかった。

11　検証結果

検証結果は次のようになった。参加人数は37名で重ねてかいたり，無記入部分もあり

検証結果

Ⅰ　実習実践の検証

1　担当授業学年　1年14，2年11，3年7，1・2年5，1・3年1，2・3年2，1・2・3年2

延１年22名，２年20名，３年12名

2　担当時間数　1～ 5時　6名　21～25時　6名

6～10　5　25～30　2

11～15　10　31～35　0

16～20　9

3　道徳担当時間　１回　16名

２回　1名

4　学級会活動　１回　14名

２回　8名

5　他の教育活動　避難訓練，学級新聞作り，校内陸上大会，生徒指導，運動会練習，遠足，クラブ活動，補習，レクリエーション，学級通信を書いた

6　指導者性別　男　12名

女　24名

年齢　23～30　10　41～51　10

31～40　14　51～55　2

7　授業の指導法

	指導者	実習生
文法訳読法	5	2
D.M.	1	1
O.M.	10	9
O.A.	12	11
C.A.	5	6
O.M. & O.A.	7	12
O.A. & C.A.	0	1

8　指導者の指導

自由で必要に応じて指導　29名

指導者の指示どうり　9名

指導なし　1名

9　教科書

New Horizon	12	New Total	4
New Crown	7	Sunshine	6
Columbus	1		

10　教具

TR	32	Video TR	1
Chart（Picture）	30	LL	3

	Flash Card	23	OHP	2
	Print	29	TV	1
	黒板	35		
11 生徒	非常に協力的	17	非協力的	0
	協力的	16	反抗的	0
	普通	6		

Ⅱ 重点の検証

1 外国語としての英語

ESL との違い 4，全員ゼロから 9，使う楽しさ 26，文化の carrier 12

2 Presentation of New Material

導入に全力かけたか 9，Oral Introduction 中心 14，音声から入ったか 12

3 Oral Introduction

適切に構成し演技できたか 7，日本語・チャートの並行使用 26

4 Oral Approach

pattern practice 22，mim-mem pra. 17

5 Communicative Approach

inter-active 23，意思伝達 4，場面設定・題材 5

Ⅲ 意識検証

1・実習前 とても楽しみ 6，期待 11，普通 6，不安 21，とても不安 7

・オリエンテーシオン よかった 11，普通 20，くどかった 4

2 実習中 指導教諭 とても優しい 10，よく指導してくれた 30，普通 5，冷淡 2，とても不愉快 1，無能 0

本学専任者訪問 元気ずけられた 21，普通 7， 緊張 1

3 実習後 参加して辛い事多く後悔 3，参加してよかった 35

12 検証結果についての考察

Ⅰ 実習実践の検証

1 担当学年

1年が41%，2年が37%，3年が22%となる。実習生の希望は殆ど関係なくその時の学校側の事情で決まるので，どの学年でも担当できるように指導することが必要である。特に一年生の指導は様々な，技術を求められるので，事前の十分な準備が不可欠となる。

2　担当時間数

最小４～最大30まで，それぞれであり，少ない場合と多い場合の持ち方の配慮事項を示す必要がある。

3　道徳

予想以上に多い。事前に道徳の時間について短時間の指導が必要である。

4　学級会

予想以上に多い。事前に特別活動について短時間指摘する必要がある。

5　他の教育活動

予想以上に様々な教育活動に参加している。積極的な参加を奨励している。

6　指導者

予想以上に女性が多い。30代が多い。指導の受け方に配慮させる。

7　指導法

OM，OA，CA，OM＋OA の四つのケースに集約できる。仮説が成立。

8　指導者との関係

指導者の24％が自分の指導法に従うことを求めてくる。仮説が成立。

9　Textbook

New Horizon が40％を占め，本学実習使用 text と整合する。

10　教具

圧倒的に使われているのは，TR，Chart，Flash Card，黒板，Print の５点である。

実習Ｉで徹底

11　生徒

母校での実施のお陰で，非協力的，反抗的な場合は一つもない。

Ⅱ　重点の検証

1　外国語としての英語

使う楽しさが70％，carrier が次，国際理解を意識してきている。

2　Presentation

Oral Introduction が意識されている。37％

3　Oral Introduction

日本語・チャートの並行利用が徹底してきて，生徒にも学習しやすい環境ができてきた。70％

4　Oral Approach

pattern practice 22 で59％が使用している。

5　Communicative Approach

inter-active な活動，生徒相互の活動に23で62%になる。

以上指導の重点についての仮説が定着したと考えてよい。

Ⅲ　意識検証

1　実習前　楽しみとする者と期待する者で33%になるが，不安と，とても不安とする者で54%に達する。この解答は重ねてよいと説明してあるので相反する気持ちを解答した者もいると考える。しかし不安を抱く者が多少でもいる状況は，私たちの努力と工夫で改善しなければならない。

2　オリエンテーシオン　普通が57%であり，くどいとする者もいることは十分反省する。

13　まとめ

英語科教育法の効果的指導の研究については，外国語としての言語指導理論，外国語指導法技術論，学習指導論，中学校教育課程編成と実施の現状，生徒指導の理論と技術，青年期の心理などの関連諸科学の知識が融合されるとともに，英語英文学の基礎的基本的学力についての確認作業が並行して要求される。1年2年の前期，後期を通してこれらが本学では巧みに教職課程，英語英文専門課程に用意されている。今回はそのなかで英語科教育法そのものに焦点化して，この2年の実践のあとを整理しながら教育実習へのつなげ方を考察して，主題の成立をねらったものである。同時に平素英語英文科の専任者の皆様のお力添えで成立している教職課程の学生たちへの教職免許状取得のプロセスをご報告申し上げたいと考えた次第である。

＊　　＊　　＊

千葉県東部の指導案の例は実際に訪問し見学した授業の例である。私たち英文科専任者全員が教え指導してきて，学生が身に付けた力が，中学校現場で受け入れられ，本人も実態に合うように工夫し，指導教諭もよく学生の特徴をつかんで，成功に導いた例である。それは，Communicative Approach の方向性を生かしつつ，OM，OA の技法を組み入れて巧みに授業を構成した。生徒に事前に QA を仕組んでいるものの，その効果は絶大で教室全体に活気がみなぎっていた。Oral Introduction の進め方も巧みで，ピクチユア・カードを駆使して大変分かりやすく，指導目標が立派に達成できた授業であった。

＊　　＊　　＊

一般に中学校側が全面的に本学学生に任せてくれるのは，こちらに対する信頼がある事と，学生が高い英語力で対応できるためと考える。検証で示されたものの多くは，今後オリエンテーション等で，事前に心の準備，知識の準備，を必要とするものであり，英語以外の分野

に関わる。指導の重点で仮説として設定したものは，実習終了後の検証で現時点では定着して中学校でも，本学学生にも受け入れられ，英語教育理論の方向性にも適うものと考えている。しかし今回の検証の仕方は，極めて情緒的，限定的なものである。より客観的な検証の方法の工夫開発を通して，効果的な英語科教育法を更に練り上げて，より良き教育実習の指導の成立を求めていきたいと考えている。

参考文献

Jespersen, O. (1961) *How to Teach a Foreign Language,* George Allen & Unwin.

Palmer, H. E. (1968) *The Scientific Study and Teaching of Languages,* OUP.

Billows, F. L. *The Techniques of Language Teaching,* Longman.

West, Michael, *Teaching English in Difficult Circumstances,* Longman. [小川芳男訳注 (1968)『困難な状況のもとにおける英語の教え方』英潮社]

Fries, C. C. (1945) *Teaching and Learning English as a Foreign Language,* The University of Michigan Press.

Lado, R. (1976) *Language Teaching,* Mcgrowhill.

Girard, D (1976) *Linguistics & Foreign Language Teaching,* Longman.

Rivers, W. M. (1972) *The Psychologist and the Foreign Language Teacher,* The University of Chicago Press.

Rivers, W. M. (1982) *Teaching Foreign Language Skills,* The University of Chicago Press.

Carrol, J. B. (1980) *Testing Communicative Performance,* Pergamon Press.

Diller, K. C. (1978) *The Language Teaching Controversy,* Newbury House.

Wilkins, D. A. (1976) *Notional Syllabuses,* OUP. [島岡丘訳注 (1984)『ノーショナル　シラバス』桐原書店]

Johnson, K. and Morrow, K. (1981) *Communication in the classroo,* Longman. [小笠原八重訳 (1984)『コミュニカテイブ・アプローチと英語教育』桐原書店]

Krashen, S. D. (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition,* Pergamon Press.

*　　*　　*

星山三郎 (1985)『新新英語教授法』金子書房

清水貞助 (1981)『新英語科教育法』開拓社

緒方勲 (1977)『現代英語教授法』現代文化社

納屋友一 (1976)『言語活動の考え方・進め方』大修館書店

土屋澄男 (1990)『英語科教育法入門』研究社出版

安井稔 (1971)『変形文法の輪郭』

広岡亮蔵 (1975)『ブルーナー研究』明治図書

塩沢利雄，伊部哲，大西光興，園城寺信一 (1993)『新英語科教育の展開』英潮社

高梨康雄，成沢義雄，西村嘉太郎，畑中孝実，久松豊 (1988)『英語科教育法の実際』成美堂

解説教育小六法 (1994) 三省堂

中学校学習指導要領 (1989) 文部省・大蔵省印刷局

中学校指導書教育課程一般編 (1989) 文部省・第一法規

中学校指導書外国語 (1989) 文部省・開隆堂出版